

‘Plague was not in London alone, it was every where.’

「疫病文学」を語ることは疫病社会を慰藉するか

服部典之

本特別シンポジウム「〈ポスト〉〈ウィズ〉コロナ時代の英語英米文学研究—デジタル・ヒューマニティーズに向けて—」は、本来〈ポスト〉〈ウィズ〉コロナ時代における英語英米文学研究のあり方について議論しようとするものであった。シンポのプロポーザルの時点で既存の価値観を覆す危機は、十分以上に大きな災禍であるとは言えコロナ禍という疫病に限定されていた。ところが2020年2月24日に始まった実質上の戦争というさらなる危機が現在進行形で動いている状況となり、これに触れざるを得ないことになった。

発表時は、疫病に加えて戦争という重大な危機に直面しているという厳然たる事実を念頭におく必要があった。服部の発表タイトルとして持ってきたシェリーの文を戦争に当てはめるなら、*War is not in Ukraine alone, it is everywhere* という戦慄が予感される現状となるであろうか。終わりを見通せない今の状況を終末論的に想像した小説として、疫病に関してはシェリーの *The Last Man* (1826)、戦争に関しては Nevil Shute の *On the Beach* (『渚にて』1957) が挙げられる。*On the Beach* で描かれる戦争はソ連と中国間で始まった ICBM による核攻撃の応酬が第三次世界大戦に拡大したことだとされる。偶発的な勘違いによる核攻撃が世界中の核戦争に発展して、人類が滅亡するというシナリオだ。今の人類が「間違い」や「偶発的に」「核のボタン」を押してしまうほど愚かでないことを祈るばかりだが、「確信を持って」核のボタンが押される可能性すら考えられる現状では、一寸先を予想することもできないだろう。

On the Beach という小説でもう一つだけ触れておくべきことは、ロシアの中国への侵略の動機が「冬でも凍らない港」確保のために、上海を奪取することだったとされる点である。この小説での第三次世界大戦の設定年は1960年代であり、この時代のソ連は黒海に面する重要港湾都市オデッサ港が自国の領地だったにもかかわらず、ここから大西洋に出るためには NATO が監視するボスポラス海峡とジブラルタル海峡を越える必要があったため、中国と戦争をして上海を自国領にしようとしたとされている。次の引用をご覧ください。

Russia hasn't got a port that doesn't freeze up in the winter except Odessa, and that's on the Black Sea. To get out of Odessa on to the high seas the traffic has to pass two narrow straits both commanded by N.A.T.O. in time of war—the Bosphorus and Gibraltar. (Neville Shute, *On the Beach* (London:Vintage, 2010), p.82)

この作品は2022年の戦争を正確に予見してはいるわけではないが、ソ連崩壊後オデッサがウクライナという他国領土となり、ロシアのウクライナ侵略の目的の一つが黒海沿岸を奪取しようというにあることは明らかで、*On the Beach* はオデッサの地政学的重要性に触れ、ソ連（後のロシア）対 NATO という対立構図が人類の破滅をもたらすというシナリオを描いており、出版当初はあり得ない話として SF のジャンルに分類されていたものだが、今再読すると身の毛のよだつリアリティを持つ書として読めてしまう。

疫病による人類破滅を描いた小説がシェリーの *The Last Man* である。出版年が1826年で、小説で設定された時代は2090年代、実に250年後の世界を想像している。この時代疫病が蔓延し、地球に残されたたった一人の人物であるヴァーニーがいかにして人類が疫病によって駆逐されてしまったかを物語る。彼は、疫病で亡くなった人を初めて目の当たりにして、こう言う。「わたしは疫病で死んだ人をそれまで見たことがなかった。みな病の影響には度を失いながら、刺激を求めて、デフォーの話や『アーサー・マーヴィン』の著作の名作を読んだ。その中に描かれた情景はあまりに真に迫っているので、わたしたちはそれを経験した気になっていた。しかし、強烈な言葉で数々の死と悲惨を描いても、言葉の引き起こす感動は冷たい。わたしがこの不幸な見知らぬ人の死体を見たときに感じた気持ちとは比べものにならなかった。これこそが疫病だった」(Mary Shelley, *The Last Man* (Oxford: OUP, 1994), p.259、拙訳)。ヴァーニーの数々の文学的知識は、たった一人の疫病による死者の前では無力であると述べ、これ自体がフィクションであるにも関わらず、文学の無力さに自己言及しているのだ。

ここで触れられている「デフォーの話」は *A Journal of the Plague Year* であり、この疫病文学を再読してみよう。語り手自身が *the Plague Year* を物語りつつ、言葉で悲惨な疫病災害の現実を表す際に感じざるを得ない無力感を吐露する有名な箇所がある。それは、まともな埋葬ができないほどの死者が出たとき、政府が大穴 (a great pit) を掘らせて、何百という死体を無造作に投げ込むことで処理している場面を目撃したときに出た言

葉だ。この 2022 年時点で我々の目に焼き付いている多数のコロナ死者を投げ込む大穴や、戦争で殺された無数の死者が投げ込まれた大穴の生々しい映像を強く想起させる。この言葉とは‘it was very, very, very dreadful, and such as no Tongue can express’ (Daniel Defoe, *A Journal of the Plague Year*(Oxford: OUP, 1969), p.60)である。デフォーという人は膨大な書き物を残した人で、その筆力で政治をも動かす力があつた人だ。そのデフォーにしても「言葉は無力」だったのだろうか。例えば「彷徨える三人衆」のエピソードを再度考えてみよう。デフォーが「後生にこのような疫病が流行った時の参考にして欲しい」としたエピソードである。ペストが猖獗するロンドンから逃げるのが、ペスト感染を逃れる手段の一つだったが、地方の町もそのことをよく知っていて、ロンドンから逃れてくる貧しい人々がすでに罹患していれば、その町にもペストが拡がることになるので、通行を禁止していた。三人がなんとか地方に進むために用いたのはまさに「言葉」だった。ロンドンから来た者ではないという「嘘」を使ってうまく通行したり、それも通用しない場合は、辛抱強く交渉に当たり、村の外れに小屋を建ててこもったりする。いずれにしても、ペストを回避するために最も重要だったのは、「言葉」の力を利用することにあつたと言える。2019 年から始まったコロナ禍を始め、*A Journal of the Plague Year* と似たような事態が生じた際に模範となるのは、状況や方策そのものというより、言葉でいかにサバイブするか、という物語の力を文学作品に読み取る点においてなのではなかったか。慰藉する物語ではなく、言葉の力で危機を生き延びる一例としてこの作品を読むとき、現在にもこの作品は意味を持ちうるのである。

さて、このシンポジウムでは、<ポスト>の世界を希望的に予想するヴィジョンを提示するのが使命ということだったはずだが、2022 年の現実を目を移すと、言葉の嘘は最悪のプロパガンダのツールとして使われ、人を殺す兵器が圧倒的な力を発揮しているわけで、我々は希望より絶望に傾斜しそうになってしまう。これからの人文学にデジタル的力を加えた<ポスト>な世界を再構築することに望みを託すしかないのかもしれない。

最後にコロナ禍の中で出版されたイシグロの *Klara and the Sun* (2021) を論じたい。Klara という AI を搭載したロボットの存在（ロボットという言葉はほとんど使われないが）は、デジタル的存在でありながら、人間以上に人間性を備えており、Mary Shelley の *The Last Man* より多く読まれている *Frankenstein* の中で、フランケンシュタイン博士の創り出したモンスターの系譜を引いた存在だといえるだろう。

Klara and the Sun において、不治の病に冒された女の子ジョジーの母親 Chrissie は、ジョジーの姉をも同じ病で失っており、残された一人娘を失わないために、娘のクローン的存在を創り出そうとする。そのクローンの役割を託されたのがクララであり、ジョジーの精神を AI の力でコピーし、振る舞いや行動もジョジーそっくりにすることで、ジョジー亡き後も、クララが娘ジョジーを continue(reproduce)してくれる存在に仕立て上げようとするのだ。極めて高度な科学技術によって娘の再生が実現すれば、いわば娘ジョジーはクララに乗り移って継続することになる、と考えたのである。母親の Chrissie は、ジョジーの Artificial Friend(AF)であるクララを Artificial Josie というクローンに変貌させるという必死の計画を友人のカパルディの力を借りて成し遂げようとしたのだった。クララ自身、下の引用のように、これは可能であったかもしれないと考えている。

‘I [Klara] did all I could to do what was best for Josie. I’ve thought about it many times now. And if it had become necessary, I’m sure I could have continued Josie. But it’s much better the way it turned out, even though Rick and Josie aren’t together.’ (Kazuo Ishiguro, *Klara and the Sun* (London: Alfred A. Knopf, 2021), p.301)

しかしクララは太陽に祈願することで奇跡的な力をジョジーに与えることに成功し病を治癒させることに成功する。AF の助けを必要なくなったジョジーは自立し、皮肉なことにジョジーの命を救ったクララは用済みとなりスクラップ置き場に捨てられてしまうのである。クララはジョジーへの強い愛情が故に自己犠牲を伴う行動でジョジーの病を治すことにより、自らの存在を不要なものにしてしまうと言えるだろう。しかし、スクラップ置き場に佇むクララは満足げだ。クララはジョジーを continue することはありなかったが、クララのデジタルな想いと愛は、ジョジーの中で continue しているのではないかと論者は考えている。クララは捨てられながらもその想い(魂)はジョジーの中に継続しているのではないだろうか。AF というロボットにも魂があるようにイシグロは描いている。<ポスト>病のジョジーは病以前のジョジーにもどったのではなく、クララという AF を引き継いだ、いわば<デジタル>ヒューマンに変貌したとも言えるだろう。<ポスト>コロナの世界は<プレ>コロナの世界に戻るのではなく、高度なデジタル技術を取り込んだ新たな世界を我々が再構築して行く必要があるということを、本作『クララとお日様』は、物語の implications とした寓話だと結論付けたい。